

## 「満洲」童話作家・石森延男の登場

満鉄社員会機関誌『協和』における創作活動を手がかりにして

魏 晨

✉ gishin19861016@gmail.com

Nobuo Ishimori (16 June 1897 - 14 August 1987), a famous writer of children's literature, was invited to Manchuria to edit Japanese language textbook for pupils in Manchuria in 1926. During 1928~1932, Ishimori penned more than 30 fairy tales in the journal, *Kyouwa*, published by the South Manchuria Railway Company (Mantetsu), which was founded by the Empire of Japan and had a strong cultural influence on Manchuria until the end of World War II. Thus, *Kyouwa*, which had a circulation of more than twenty thousand, had become the promoter of Japan, which dominated the culture of Manchuria.

This paper examines Ishimori's contributions to *Kyouwa* and reflects on how he became a writer of children's literature and represented Manchuria. First, it analyzes the history and general context of *Kyouwa* and focuses on the contents regarding children. Second, it analyzes Ishimori's work in *Kyouwa* and argues how Ishimori changed his theme from opposing militaristic education to depicting Manchurian life emotionally. In conclusion, this paper argues that *Kyouwa* played a role in the development of Japanese children's literature in Manchuria and Ishimori became a children's literature writer in Manchuria according to his publications in *Kyouwa*.

**Keywords** Nobuo Ishimori(石森延男), “*Kyouwa*”(『協和』), children's literature (児童文学), Manchuria(「満洲」), *Mantetsu*(満鉄)

## 1. 問題提起

児童文化は他の文化現象と異なる特徴を持っている。児童文化の重要な一部となる児童文学が国語教育の延長とみなされるように、児童文化はかねてから、児童に娯楽を提供するだけでなく、育児や教育のためになるという役割も期待されてきた。戦前日本の植民地支配及び帝国主義拡張の一翼を担う形で、日本語教育は、朝鮮、台湾や「満洲」といった〈外地〉で盛んに行われるようになった。それに伴い、〈外地〉の日本語児童文学・文学者の需要が高まったのである。特に「満洲」では、台湾と朝鮮と違い、日本人は建前上「五族」の一つでしかなく、日本語も満洲語<sup>1</sup>、朝鮮語、モンゴル語などの言語と併存せざるを得なかった。日本人の支配民族という立場を保ち、尚且つ「満洲」の子供を「満洲」に根付かせ、そしてより多くの〈内地〉人を「満洲」に定住させようとする戦略には、日本語教育、そして日本語児童文学が必要とされたのである。そこで、日本語教育の延長となる日本語の児童文学も多数創作され、多くの童話作家が「満洲」へ渡り、「満洲」ならではの作品創作を模索していた。その中で、石森延男は、彼なしには「満洲」の児童文学を語るができない存在だった。

石森延男は、1897年6月16日に札幌市に生まれ、東京高等師範学校を卒業後、愛知県、香川県の学校で教師として勤めていた。1926年4月、大連の南満洲教育会教科書編集部に転勤、国語教科書の編集に従事した。1932年には大連民政局地方課学務係に落ちつき、「満洲」の子供のために、『満洲文庫』（東洋児童協会 1934）十二冊を編集した。1938年、「満洲日日新聞」夕刊に小説「もんく一ふおん」を連載し、これが彼の出世作となる。1939年、日本に帰国し、「もんく一ふおん」を『咲きだす少年群』（新潮社 1939）と改題して出版し、第三回新潮賞を受賞した。その後も、『スングリーの朝』（大日本雄辯會講談社 1942）、『マーチョ』（成徳書院 1944）などの「満洲」を題材にした童話作品を書き続けていた<sup>2</sup>。

「満洲」時代における石森については、豊かな研究成果<sup>3</sup>があるが、主に有名な作品を取り上げ、創作者の視点から分析を行い、彼の活動を整理するなどの作品論・作家論的研究が多く見られる。そこには二つの不足点が挙げられる。一つは、石森がどのような

1 中国語のこと。

2 石森延男の経歴については、『日本児童文学大系23』（はるぷ出版、1977）と『石森延男児童文学全集』（学習研究社、1971）付録の年譜を参考した。戦後になって、彼は昭和女子大学や山梨県立女子短大などで教授として勤めながら、『コタンの口笛』（東都書房、1957）を世に出して反響を呼び、第1回未明文学賞と第5回産経児童出版文化賞を授与された。その後も、自らの外遊にもとづいた『パンのみやげ話』（東都書房、1963）などの児童文学作品を創作し続けていた。

3 主な先行研究は以下のものが挙げられる。川村湊は著作『海を渡った日本語』（青土社、2004）の第六章「ワタクシドモハマンシウノコドモデス」に、石森延男と「満洲」の日本語教育との関係について論じている。寺前君子は「満洲における石森延男の足跡——同人雑誌「童心行」の概要と細目」（『中国児童文学』、2011）で同人誌「童心行」に関する資料を整理したが、その内容そして石森と「童心行」との相互関係については言及していない。そのほか、森かをるは「『咲きだす少年群』と『コタンの口笛』における〈日本語〉・〈種族〉」（『名古屋近代文学研究』、2007.12）で、『咲きだす少年群』を戦後作品『コタンの口笛』と比べて、石森文学における国語教育と種族について論じている。

メディアにおいて作品を発表したのか、つまり彼にまつわる創作環境について検討されていないことである。石森が「満洲」で活躍できる土壌としてのメディアとの関係を視野に入れるべきだと考えられる。もう一つの問題点は彼の渡満初期の活動について殆ど言及されていないことである。そのため、彼が「満洲」の童話作家として登場する過程は未だに不明な点が多く存在するのである。石森の初期活動を一貫して考察することを通して、彼が「満洲」童話作家として登場する経緯を解明すべきだと考えられる。

石森は1928年8月から1932年8月までの創作初期に、南満洲鉄道株式会社<sup>4</sup>社員会機関誌『協和』に三十篇以上の作品を立て続けに発表した<sup>5</sup>。『協和』は「満洲」の文化に強い影響力を持つ満鉄の社員会機関誌として、2万部の刊行数を誇る。後述するように、多くの同人誌がわずか1,2年で終刊してしまっただけに対して、石森の『協和』における創作活動は、1932年大連民政局地方課学務係に転職するまでの渡満初期を貫いている。本稿は満鉄社員会機関誌『協和』を取り上げ、『協和』における児童文化の様態を明らかにした上で、『協和』における石森の活動を考察する。これらの考察を通して、『協和』という土壌において、石森がどのようにして「満洲」の童話作家というアイデンティティを芽生えさせていったのか、を明らかにしたいと思う。

## 2. 多彩な満鉄社員会機関誌『協和』

### 2-1. 『協和』の成立と発展

『協和』は1927年4月1日、満鉄社員会という組織によって創刊された雑誌である。『協和』を考察するには、刊行機関とされる満鉄社員会の創立、及びその機関誌『協和』の創刊に至るまでの経緯<sup>6</sup>を見る必要がある。

満鉄社員会の前身は、満鉄が創立されて間もない1908年に結成された読書会である。それは職員の全部と日本人傭員の内入会を希望し、許可された者を会員とする会員組織で、会費は月額十銭が徴収された。社員の親睦を深め、教養を高めることが目的とされた。当時の会員数は、約四千名であった。翌1909年4月、『自修会雑誌』が創刊され、1914年『読書会雑誌』と改称され、1927年3月まで続けられた。会社の創立20周年を期に、社員会が結成され、読書会の事業は社員会に継承されることとなった。それと共に、読書会雑誌も一応の役目を終了し、社員会の機関誌として継続されることになり、その名も『協和』と改められた。1927年4月1日、その第一号が発行され、会員となった約2万の社員に配布された。『協和』は満鉄内部の雑誌でありながら、「満洲」随一の国策会社満鉄に支えられ、「満洲」各地にいるおよそ2万人の社員を通して、「満洲」全域に広がっ

4 これ以下、満鉄と略す。

5 作品リストは文末の表3にまとめている。

6 この経緯に関する記述は(財)満鉄会編集『協和』復刻版(東京:龍溪書舎, 1983)の総目次集の「はじめに」をもとにした。

て強い影響力を持っていたことが推測できる。

『協和』の創刊号に雑誌の趣旨を示す「創刊の辞」が載っている。

本誌の期するところは社員の一機関として外に対してはその理想実現の一段となり、内に対しては最も自由、公明なる会員相互の意志発表機関たり、意思疎通の手段たらんとするにある。かくて全会員を渾然として融合したる一丸に達成するを得ば本誌創刊の目的は完全に果たされたるものと云ふ可きである。(略)本誌の最も期する所はこの連帯意識の構成であり、融和的精神の長養である。本誌が特に「協和」と名付けられたる所以もこの意義に外ならないのである<sup>7</sup>。

「創刊の辞」から、『協和』の主要な役割は社員の団結に貢献する所にあり、雑誌名「協和」も「連帯意識の構成」と「融和的精神の長養」を意味するものかどうかかわれる。我が満鉄のため、社員に向けて貢献する機関誌というアイデンティティが強く意識されていたのだろう。

以下の表に示すように、『協和』は創刊の時の月刊から週刊の試みを経て、月二回刊(毎月1日、15日刊行)に定着し、太平洋戦争末期に雑誌から新聞へとメディアの形態を変えた。筆者は雑誌『協和』の発行期間をそれぞれ創刊期、模索期、定着期に区分する。

表1

時期の区切り	形態	備考
第一期 (1927年4月~1928年7月)	月刊	創刊期
第二期 (1928年8月~1929年4月)	週刊	模索期
第三期 (1929年5月~1941年12月)	月二回刊	定着期
第四期 (1942年1月~1944年)	新聞型	※欠刊により、終刊日が不明である。なお、新聞紙になり、今回の考察対象外となる。

歴代の編集者は表2にて示した。編集者のほぼ全員が満鉄で勤務する傍ら、教育や文芸などの文化活動を行っているところに注目すべきである。その中でも、二代目の編集者である上村哲弥<sup>8</sup>は雑誌に大きな影響を与えた人物だと思われる。彼が編集者を務め

<sup>7</sup> 『協和』(第1号, 1927.4.1).

<sup>8</sup> 上村哲弥、1893年、鹿児島県生まれである。1919年、東京帝国大学法学部政治学科を卒業して満鉄に入社した。1925年、満鉄に命じられ、シカゴ大学で社会事業、とくに児童保護施設および成人教育運動の研究を行った。翌年、イギリスに赴いて児童福祉などについて視察調査し、翌年帰国した。1928年、満鉄副総裁松岡洋右の理解と支援により、日本における実験心理学者の松本亦太郎を会長に、顧問には初代満鉄総裁後藤新平と東京帝大時代の恩師新渡戸稲造を迎えて日本両親再教育協会を設立した。1932年、「満洲国」文教部創設に参画し、総務司長となった。1935年、また満鉄に復帰し、総裁室福祉課長を任せられ参与を兼ね、翌年退職した。満鉄退職後、日本小国民文化協会の常務理事・事務局長を務めた。戦後は日本女子大学教授などの教職にも携わった。

た時期に、雑誌は刊行頻度の変化など、さまざまな模索を経て、形態や内容が定着した。

表2

勤務期間	編集者	社員以外の身分
1927年4月~1928年1月	川村牧男	
1928年2月~1932年5月	上村哲弥	児童教育家
1932年5月~1934年4月	加藤新吉	のち華北交通局長
1934年5月~1936年6月	城所英一	詩人
1936年6月~1939年1月	福富八郎	社員会叢書執筆
1939年2月~1941年12月	河瀬悌二郎	社員会叢書執筆

## 2-2. 『協和』の内容

『協和』はいくつかわの変化を経験するに伴い、その内容にも変化が見られるものの、①時局政治、②社内動向、③家庭生活、④文学芸術という四つの部分に分けることができる。

時局政治は、主に日本、「満洲」、そして中国で起きた重大な事件に関する報道及び社説である。例えば、満洲事変勃発後の1931年10月15日号には、社員会による「満洲事変声明書」、そして一ヶ月後の11月15日号には、「満洲事変第二次声明書」がトップトピックになり、事件に関する特集が組まれている。言うまでもなく、その二回の声明書では、満鉄は日本側の論調と同調し、関東軍に協力する立場に立つと宣言した。満鉄は『協和』を通して、満洲事変について報道しつつ、満鉄としての立場を表明し、満鉄社員としての使命を社員に言い渡すのである。

社内動向は一面の新聞という形式を用いて満鉄内部、特に社員会の動向を紹介するもので、「満鉄だより」、「満鉄新聞」、「半月ニュース」、「社業連絡」などのタイトルが使われた。各地、特に地方にいる社員の異動、仕事の進展などが報告され、「満鉄社員奮闘記」(1931年12月15日号)のように、満鉄社員の仕事を評価する特集も多数組まれている。各地域で多角的な経営を展開していた満鉄にとって、『協和』は社員の情報共有、組織の一体感を高める重要な手段とされていたのである。

家庭生活は、料理、育児や家庭医学などの主婦向けの内容が大部分となっている。消費組合頁や主婦の買物案内など定番の内容となっており、社員だけではなく社員の家族、特に社員を陰で支える主婦も、読者層として想定されていたことがうかがわれる。

文学芸術は一貫して載せられており、『協和』の特徴となっている。中には、日本の作家の作品、外国作品の邦訳版、そして社員の同人作品などの様々な文芸作品が載せられている。そのほか、社員向けの文芸創作懸賞も数回行われ、読書欄において書籍紹介も書かれている。例えば1934年に募集した「満洲郷土文芸十二種懸賞」があげられる。締め切りは当年11月10日とされ、その2ヶ月前頃から、毎号のように広告が出されてお

り、宣伝に力が入れられていた。その懸賞広告では、満鉄社員に向けてこのように呼びかけている。

満洲の郷土文芸がほしい。満洲最大の読者層を持つ我等の“協和”は常に門戸を開放し、鶴首して良き作品を待つてゐるが文芸の投稿はまことに少ない。公務に追はれてゐても秋の灯の下に詩情の湧く瞬間もあらう。我等は協力して満洲郷土文芸をはぐくみ育てよう。出来るだけ満洲色のある作品を創り出さう。

『協和』の持つ文芸への関心は、既成の作品を鑑賞することのみならず、常に「満洲の郷土文芸」を育てることを意識し、「満洲色のある作品」を求めることにもあった。「満洲最大の読者層を持つ『協和』は、「満洲」の文芸を創出する使命を託されていたことがうかがわれる。また、募集するジャンルは小説、童話、実話、詩歌、俳句、写真などの十二種あり、その規模と影響力を拡大しようとしたことがうかがわれる。『協和』はさまざまな形で文芸を重視し、「満洲」文芸を創出する使命感まで抱き、その編集に力を入れていたと考えられる。

### 2-3. 『協和』における児童文化の展開

児童向けの内容がはじめて登場したのは1928年週刊に改版した際であった。当時の編集者は児童教育家の上村哲弥であり、児童向けの内容の登場はおそらく彼の関心と密接にかかわっているだろう。最初は、文芸作品に混じって掲載される場合が多く、内容も童話のみであったが、作品名の前後に「童話」や「子供よみもの」などの文句をつけることは少なくないことから、児童向けの内容を他の文芸と同一視せず、特別に意識されているものだと考えてもよい。その後、児童向けの作品は文芸欄と家庭欄の両者に登場するようになった。文芸作品の一種として掲載されつつ、社員の家庭生活を支える育児の一部としても見られているからだと思われる。児童向けの内容は満洲事変や支那事変の影響を受け、一時誌面から消えたが、時勢が落ち着くと、再び姿を現した。

当初、童話のみの単調な内容であったが、1934年4月1日号には、「ボクノニツキ——子供の頁」という項目が設けられ、のち「コドモノページ」をタイトルにして定着した。作文や児童画など、児童による作品を掲載するスペースである。編集側は読者である子供に雑誌に参加してもらおうと工夫していた。子供による投稿の大部分には、家庭や学校における「満洲」の生活の日常風景が描かれている。『協和』の読者は満鉄社員を通して広がり、社員の子弟にも読まれていたと考えられ、満鉄社員にまつわる家庭生活の一面も伝わってくる。

児童文芸以外にも、重要な出来事について児童にインタビューする記事や重要な出来事について児童に書かせた綴方を載せたりしている。満洲事変後、「少年少女の見た満洲事変<sup>9</sup>」(1931年12月1日号)というタイトルの記事では、吉林尋常高等小学校の生徒が書

いた作文が13件掲載された。主に二つのテーマに分けられ、一つは、日本の兵隊さんに感謝し、応援する文章である。生徒たちは口を揃えて「兵隊さんにあつくおれいを申し上げます<sup>10</sup>」、「吉林にゐて安心してくらしで行けるのもみんな兵隊さんのおかげです<sup>11</sup>」と個人と兵隊と事件をうまくリンクしている。もう一つは、満洲事変についての認識に関する内容である。そのテーマには、「今度の事件は無論支那が悪いのだと僕は思ふ。先生の話によると支那兵が鉄道を破壊しようとしたとき向かふから鉄道守備隊の日本兵が来たので通りすぎてから破壊したそうである<sup>12</sup>」と学校で教えられた当時日本の論調を繰り返す作文ばかりだった。

「満洲」の運命を左右する満洲事変と支那事変の際、『協和』では、兵隊の勇姿を賛美しつつ、満鉄社員の奮闘ぶりを子供に伝えようとした。例えば、1938年1月1日号では、「兵隊さんのお手伝ひ——支那事変で活躍する満鉄の小父さんたち」を題とする特集が記載されている。この記事は、勤君という少年が彼のお父さんと会話するという形をとり、勤君がお父さんから、満鉄の社員が兵隊さんに協力する大変さと重要さを教えられる内容となっている。子供に一番親近感のある家庭内の会話を模倣し、さり気なくその満鉄の立派なイメージを小さい読者たちの頭に植え付けようと工夫を凝らしていた。また、子供が主力となる愛路少年隊<sup>13</sup>について惜しまず大きな版面を使って紹介した。1938年7月1日号の記事「愛路少年隊」では、愛路少年隊の使命の尊さ、訓練の内容、貢献や格好よさ、そして就職率の高さなどを各側面からアピールした。その記事を通して、子供に向けて、「愛路少年隊」への参加を呼びかけようとしていたのである。

童話、作文、絵画、子供向け記事…そのバリエーションの豊富さは一般雑誌にも負けないものである。『協和』は子供を受信者としても、発信者としても意識し、扱っていると言える。その理由もやはり『協和』の社員会機関誌というアイデンティティと関わっている。つまり、社員をサポートする意識から、職場だけではなく、社員の文化向上、家庭生活もサポートする考えが生まれたのである。もう一つ考えられる理由は、次世代に満鉄を宣伝し、出来事の解釈フレームを植え付けることを通して、満鉄を支持する次世代植民者を育成することである。

『協和』は植民地支配の中核・満鉄の機関誌であり、その「創刊の辞」に書かれているように、満鉄社員の「連帯意識の構成」と「融和的精神の長養」を目的としている。言い換えれば、この雑誌はあくまでも満鉄に利するためにつくられたものである。しかし一方で、『協和』は、児童向けの内容を取り入れることによって、童話作家たちが創作能力を試し、腕を振るう舞台ともなり、在満児童の児童文芸を楽しむ数少ない手段となってい

9 記事掲載ページにあるタイトルと異なり、目次に書かれている記事タイトルは「少年少女の事変観」となる。

10 町田壽美江「兵隊さん」吉林尋常高等小学校五年。

11 齋藤房子「兵隊さんにおくる言葉」吉林尋常高等小学校五年。

12 大家一男「事件」吉林尋常高等小学校五年。

13 1933年、鉄道を馬賊から守るため、満鉄は鉄道両側に鉄道愛護村を設置し始め、その翌年、村で愛路少年隊を結成した。少年隊員の招集は村長および学校を通して行われる。愛路少年隊では将来の鉄道愛護の主力を育てるように、鉄道常識や通信、測量などの技術を少年隊員に教授する。

た。この雑誌は意図せざる結果として、「満洲」児童文化が芽生える重要な土壌となり、「満洲」児童文化を育ててしまったのである。

### 3. 『協和』を舞台にした児童文学者・石森延男

「はじめに」にも言及したように、石森は1926年4月、大連の南満洲教育会教科書編集部への転勤をきっかけに渡満し、国語教科書の編集に従事する。1927年2月、「満洲」の中学生のために読物雑誌『帆』を年三回発行で2年続けた。そして、1928年、小学生のための読物雑誌『満洲野』を自費で刊行したが、2年で廃刊してしまった。また、1930年、在満日本人子弟のために『まんちゅりあ』上下二巻を、翌年の1931年童話集『どんつき』を刊行し、同人誌『童話文学』にも参加した。その同人活動の試行錯誤と同時に、すなわち1928年8月から1932年8月までの創作初期に、彼は『協和』で作品を発表していた。

当時の編集者は広い人脈を持つ児童教育家・活動家の上村哲弥であり、『協和』における創作活動は上村との付き合いを通して成り立ったものだと考えられる。発表の時期は『協和』が児童向けの内容を取り入れ始めたころであり、日本語で創作できる有能な童話作家が求められていた時期だと考えられる。実際に、『協和』における童話第一作も石森延男によって創作された「メーリーゴーランド」であり、更に1928年~1929年、児童向けの内容はほぼ石森延男の童話で埋め尽くされてしまうほど、石森延男は『協和』の児童文化の重要な担い手だった。それと同時に、『協和』において作品を発表し続けた石森延男も作家人生の大きな転換を遂げたのである。その転換は『協和』における創作活動から垣間見ることができる。

#### 3-1. 〈内地〉反軍童話の継承

石森が『協和』に発表した作品は、童話、児童劇、伝説、ラジオプレイ<sup>14</sup>などがあり、多ジャンルに跨っている。試作的な短編が多く、子供の生活をスケッチするのに工夫をこらしている。大部分の作品は母性、兄弟愛、友情の賛美をテーマとしている。その他、動物を主人公に、自然との調和をモチーフとする作品も見られる。前川康男氏は「解説 石森延男」<sup>15</sup>において、石森の作品を童話風エッセー、空想童話、そして写実的な長編物語という三つの種類に分けている。『協和』作品にはその三種類がすべて含まれており、その後の児童文学創作の基礎となった。更に、『協和』で発表した一連の作品を通して、石森の創作意識の変化が示されている。

最初『協和』において、石森は〈内地〉で流行っているテーマや文体をそのまま「満洲」に持ち込んだ。例えば、20年代初頭盛んであった反軍思想をテーマにする作品「MARCH」

<sup>14</sup> ラジオで放送する童話劇のシナリオである。

<sup>15</sup> 『日本児童文学大系』23(はるぶ出版、1977)。



(1928.8.25)、「窓が明いた(一)~(三)」(1928.9.1~1928.9.15)が書かれている。

「MARCH」は外科の名医H博士の小学校時代の話である。あらすじは以下の通りである。

当時、毎朝、生徒たちは戸内運動場に集まって朝礼をしていた。終わったあと、生徒たちはいつもべこ先生の指揮にしたがって日清戦争の軍歌を聞きながら教室に戻る。H博士はそれが嫌いだった。ある日の朝礼が済むと、岡野先生が代わりに指揮することになり、美しい音色をオルガンで鳴らした。H博士はその美しさに魅了された。その後、岡野先生が鳴らしたのは「MARCH」という洋楽だとわかった。大人になって外科という仕事に苦しめられた時に、「MARCH」を思い出しながら、なんとか乗り越えることができた。

「窓が明いた」はある中学校で起きたことである。あらすじは以下の通りである。

南海の漁村にある中学校で、地理標本室が火事になった。現場にいた佐藤は地理標本室でタバコを吸って引火してしまったと疑われた。軍人権田中尉による訊問が行われ、佐藤のポケットにある南京豆の皮はタバコの粉ではないかと疑われ、きつく責められていた。結局、佐藤は退学処分をさせられた。実は佐藤は中田という学校の優等生を庇うために、教室で喫煙したのは中田という事実を黙っていたのだ。中田は自白しようと思ったが、せっかく佐藤がかばってくれたので、事件を落ち着かせることにした。しかし、息子の卒業を期待していた佐藤の母親に事情を説明し、この件を詫言った。

この二つの作品はともに渡満して間もない1938年に発表したものであり、中心テーマが異なるものの、単調な軍国主義教育に対して否定的な態度を示すところが近似している。

まず、「MARCH」を見てみよう。学生を指揮するべこ先生の描写は以下のようである。

段のそばにおいてある古ぼけたオルガンにどつかり腰をかけて、顔を生徒の方に向けて『前へ進め!』と大音声をあげる。そこで、全校生徒は、足踏を初めて、一年生から順々に、教室へ行進してゆくのです。べこ先生は、両肩をいよいよいからせて、踏板をがたがたふみしめては、すざまじく鍵盤を押しつける。その曲は、毎日同じもので『煙も見えず雲もなく——』といふ日清戦争当時の軍歌の節なのです。

べこ先生は乱暴かつ滑稽に描かれており、「前へ進め!」と最後に出てきた日清戦争の軍歌がその描き方と呼応している。石森は、教育現場においてこのような場面が出ることに對して違和感を持っていたのではないかと考えられる。べこ先生と正反対のイメージを付与された岡野先生との比較が加わり、軍国主義教育への否定がより明白になっている。

岡野先生は、それきりどこかへ行つてしまはれて、その日から、べこ先生が又オルガンに座りました。そして、仇うちでもするやうな勢で、踏板をふみしめては、肩をいからしました。曲はお得意の『煙も見えず雲もなく——』です。私は、子供ながらに、これではたまらないと思ひました。この単調な荒々しい音をきけばきくほど、岡野先生のひびきがなつかしくなり、美しくなりました。

岡野先生とその美しい曲と共に、「単調な荒々しい」軍国主義教育への対抗を象徴しているだろう。

もう一つ、興味深いのは主人公と彼の職業との関係である。最後の結末に注目する。

私は毎日毎日、何人かの手を切り落したり、お腹を裂いたり、肉を削つたりしてくらしてあります。…老いたこの耳朶の底に、残つてゐてくれるそのひびきが、忽ち私を勇敢にし、至純な世界に一気に導いてくれるのです。そこで私は、医者らしい落ちつき自責にたちかへつて神聖な切開を難なく仕遂げることができるのです。

主人公はH博士という外科医者に設定されているが、世間が思う人命救助者というイメージから逆行し、H博士は自らの仕事を「何人かの手を切り落したり、お腹を裂いたり、肉を削つたり」することとして受け止めていた。「何人かの手を切り落したり、お腹を裂いたり、肉を削つたりしてくらしてあります」という表現は人を殺すと思わせるほど残酷な捉え方だろう。それは外科医という職業を意味するだけではなく、当時人を殺しそうになる、つまり戦争への感覚的な不安を表しているのではないか。そして、岡野先生の自由と美を謳う曲に救われ、「そこで私は、医者らしい落ちつき自責にたちかへつて神聖な切開を難なく仕遂げることができる」ようになる。軍国主義教育から救出され、「至純な世界に一気に導いてくれる」わけである。

「窓が明いた」では「MARCH」とはテーマが異なるが、軍人にマイナスのイメージが付されるところから、「MARCH」と同じく軍国主義教育批判の論調にたつだろう。

しばらくして、会議室のドアが開かれて、佐藤がひき出された。佐藤は大勢の職員の前に立ちながら少しの悪びれも見せなかつた。何の臆した気色もなかつた。その態度が、いかにも不遜だといつて、職員たちは先づ怒つた。佐藤についての訊問は、すべて軍人権田中尉に任せることにしておいた。権田中尉はつかつかと佐藤の前に突立つた。佐藤は号令をかけられた時のやうに真面目に『氣を付け』の姿勢になつた。それが又、弥次半分の動作だといつて憤つた職員もあつた。

(略)

権田先生が、お前らに、徴発といふことを教へてやらう、それは軍隊ではいつもやることで、実に愉快なものだ。荒野はこんなにもいい月夜だ、これから向ふの葡萄園にいつて、葡萄を徴発してこいといはれます。これをきいた生徒らは皆大喜びです。大隊長になつてゐた中田は、すぐさま徴発隊を組織しました。その中に私も選ばれてゐました。そこで私は中田に、そんなこといやだと申したてました。だつて先生のいひつけでないかと中田はききません。いくら先生だつて、そんなことできるものか、まあこんないひさかひをして、私はとにかくやめることにしてしまひました。

軍人権田は佐藤へ乱暴な態度を押し付ける悪役として描かれると同時に、佐藤は悪び

れずに、ユーモアをこめて対抗している。また、軍隊の習慣について冷静に思考を働かせ、周りの人に盲従もせず、自分の価値観を貫いている。佐藤のスタンスは作者・石森のスタンスでもあるのだろう。

この二つの作品は「満洲」ではなく、日本の大正末期から実施されていた学校軍事教練を背景に、軍国主義教育を批判している。1917年12月、総理大臣の諮問機関である臨時教育会議は、「忠愛心」と「他日軍務に服するの素養」を主眼として、兵式体操振興を建議した。1925年4月4日、中学校令実施規則が改訂され、教練実習のために体操の各学年毎週教授時数が3時間から5時間に増加した。同年4月11日、勅令第135号として「陸軍現役将校学校配属令」が公布・施行され、官立・公立の中学校、師範学校、専門学校、高等師範学校等において、「男生徒ノ教練ヲ掌ラシムル」ことを目的として現役将校が配属された<sup>16</sup>。

その軍事教練の学校教育への介入は、賛否両論の世論を巻き起こした<sup>17</sup>。明治維新後、特に日露戦争期以来、長く続いてきた富国強兵思想を援引し、軍事教育を擁護する人がいたのに対して、大正の軍縮と「世界の潮流」であった平和主義に傾倒し、軍隊を無用の長物として捉えたため、反対する人もいた。このような時勢は児童文学の領域にも反映されており、与謝野晶子や『赤い鳥』同人たちの童話がその代表である。この二つの作品から、石森はこれらの児童文学者と同じく、軍事教練に対して否定的な態度を持ち、反軍反戦童話を創作していたことがわかる。

昭和に入り、大正デモクラシーはだんだん衰えていった。それに伴い、反軍反戦童話も声が聞こえなくなった。長谷川潮氏の言葉を借りると、「こういう作品<sup>18</sup>がうまれたところに、大正デモクラシーの時代が示されている。昭和初期には絶対に発表できなかった作品である<sup>19</sup>」という。石森は世論規制が厳しくなりつつある〈内地〉では、その二つの作品を発表できなかったと容易に想像されよう。『協和』は石森に反軍反戦の態度を表明する機会を与えたのである。

### 3-2. 「満洲」童話作家への変身

最初に『協和』に作品を発表し始めたころ、石森は〈内地〉の児童文学風潮の延長線上で、作品を創作していたことがうかがわれる。しかし、「満洲」で生活するにつれて、「満洲」現地の児童文学を創作する意欲が沸き上がってきた。その意欲の形成について、石森は『満洲補充読本』<sup>20</sup>の創作経緯について述べた時に、言及している。

16 文部書編「学制百年史」(ネット公開中, 1981.9.)及び日本近代教育史事典編集委員会編『日本近代教育史事典』(平凡社, 1971)を参考にしている。

17 谷口俊一氏は「兩大戦間期における軍人のイメージ——新聞投書欄を中心として」(『年譜』, 2000)で詳細に論じている。

18 反軍思想をもつ中村星湖「いたづら水兵」(『赤い鳥』, 1923.8.)という作品のことを指す。この作品では、上官への反抗や処罰逃れ、さらには勲章の権威の否定などが堂々と語られている。

19 長谷川潮「第三章大正デモクラシー下の戦争児童文学」(『日本の戦争児童文学史』ミネルヴァ書房, 2012), p.36.

20 在満日本人子弟のために、南満洲教育会教科書編輯部により、編集された国語教科書である。石森延男はその編集者の一人となる。

わたしの渡満動機は、満洲に憧憬したのではなく、教科書編集部の副主事赤塚吉次郎が中国留学を命ぜられたあと埋めにいくようにと恩師諸橋轍次先生のすすめによったものである。ところが現地に行って、はじめて日本人子弟の精神生活を観察して、その浮草の不安定さの深いのに驚いた。よくもいままでこのような日本内地延長の旧態依然たる考え方で生きておれたものといひ嘆息を洩らした。これでは、この地を故郷として成長、活動する子どもたちはあまりにもみじゆだ(ママ)と感じたのはわたしひとりではあるまいが、だれもいまだ手をつけてはいなかったのだ。そこでどうしても郷土満洲を肌で理解させ、愛着を持たせなければということを痛感し公の機関でこの情熱を具体化したものが「満洲補充読本」である。<sup>21</sup>

子どもを「満洲」に馴染ませるために「満洲」色を追求するのは彼の「満洲」児童文学創作の原点であり、しかも渡満してからだんだんと芽生えたものである。渡満初期のさまざまな模索を経て、『満洲補充読本』の創作に辿り着いたと考えられる。そして、『協和』に掲載されている初期作品に、この創作意識の萌芽が見られる。28年~30年ころの〈内地〉風作品と異なり、31年~32年『協和』において発表した作品は子どもに親しみやすい児童劇がメインとなった。そして、その児童劇のタイトルに意図的に「満洲生活児童のために」や「満洲小学生のために」といった説明を加える。内容も「満洲」の要素を積極的に取り入れようとしていた。最も明白な例は「グレート大連」という「満洲生徒児童のために」創作した「小さな学校劇」である。この学校劇は、生徒が自ら「星が浦」「沙河口」「大島將軍の銅像」などの大連の名所を演じて、それぞれの名所を紹介するものである。はじめはどの名所も大連の一番になりたかったが、どの名所も大連の一番だという円満なエンディングとなり、「グレート大連はますますりつばな町となるでせう」という結論が下される。この劇に、子どもに故郷「満洲」を知ってもらい、愛してもらおうという意欲が含まれていることは間違いないだろう。

その後発表した「雀とペチカ」も、「満洲生活児童のために」を創作目的とされている児童劇作品である。この作品は現実生活の場面を織り込んで創作した「グレート大連」と違い、擬人化の手法を用いて、寒さに耐えられなくなった雀がペチカに助けられた物語となる。「満洲」を直接表現していないが、北風、ペチカなどの北国を想起させる要素を取り込むことによって、「満洲」の子どもを実感させようとしている。更に、この作品の最後に備考が書かれている。石森は雀が煙突に入ると、死んでしまうので、物語が成り立たないという意見に反論し、「自分の考へでは、事実をそのまま認容するのではなく『雀とペチカ』といふ対照に「満洲」らしい情味を示さうとした浪漫風なものを示さうとしたのである」と述べた。「雀とペチカ」が「満洲」の生活雰囲気を意識して創作されたのは明らかである。

ここで、一つ注目すべきであるのは、石森は前期作品をもって軍国主義を批判したが、日本による「満洲」支配については肯定的な態度を示していた点だ。彼は自らの全集

<sup>21</sup> 石森延男「満洲児童文学回想」(『児童文学研究』日本児童文学学会、1972)。

『石森延男児童文学全集』(学習研究社、1976)に収録された「満洲」で書かれた作品について「あとがき」を書いている。

『赤い木の実』は、マンシュウの伝説を書いたものです。マンシュウというのは、中国の東北にあった国で、しばらく日本がたすけておさめていた大国でありましたが、第二次世界戦争のあと、中国にもどったところです。

4巻(「うつくしいままりも・赤い木の実」の巻, p.309.)

マンシュウ国という新しい国は、マンシュウ人が自分で建設させたというよりは、日本人が、こしらえたといったほうがいいでしょう。いろいろこみいったむずかしいわけがあったとは思いますが、日本人が作りあげ、日本のためにやくにたてようとしたと思われるます。

7巻(「太郎・スガリーの朝」の巻, p.314.)

石森にとって、日本の「満洲」支配は日本が「満洲」を「たすけておさめていた」ことであり、「満洲国」は「日本人が作りあげ、日本のためにやくにたてようとした」建設の結果となる。これらの言説は戦後に入った後に述べられたことも実に興味深い。

石森は作品を通して、どのような「満洲」のイメージを示したのか。『協和』作品にあらわれている「満洲」の表象は二つの特徴が見いだせる。ひとつは、穏やかな生活の場所として描かれていることである。もう一つは子供の豊かな感性を引き出す幻想的風景として取り上げられていることである。以下の二つの例を挙げてみる。

彼と仙太は、西公園のアカシヤ並木の下を、電気遊園の方へ、歩いてみました。縁門(アーチ)がたに茂つた青葉をもれる朝の陽がけが、滑らかな石道に斑になつて、ふりそそぎます。白地緋をきた彼と仙太は、日なたをうけてうす黄になつたり、日がけをうけて、うす緑になつたりして歩きました。

(「メーリーゴーラウンド」1928.8.4)

かがやかしい秋の空、白いちぎれ雲、柳木立、赤土道、青い海、小さな戎克——少年は、アンデルセン童話の飛行靴に乗つたやうにただうつとりして、きよるきよるあたりの風景に見とれました。

(「童話方々(その4)」1929.9.15)

「メーリーゴーラウンド」に描かれている西公園のアカシヤ並木も電気遊園も大連で暮らしている子供達の日常である。穏やかな夕方、そして子供の生活の断片を拾い上げている。しかし、その描写はただ日常を描くのではなく、ある種の非現実性を表現しようとしている。木漏れ日の明暗変化を表現し、白地、うす黄、うす緑といった色を次々登場させ、カラフルな幻想的な空間を作り上げたのである。「童話方々(その4)」にも、日常の事物を並べた後、「アンデルセン童話の飛行靴に乗つたやうに」とその幻想世界に

読者を案内する内容が見られる。

『協和』作品に描かれた「満洲」はどれも戦争とまったく無縁な異郷となっている。石森にとって、「満洲」という広大な土地は子供の感性を育てる生活の場所であり、戦争と強く結びついているはずであった「満洲」は、軍国主義教育から遠ざかっている子供の理想郷でもあった。軍国主義教育への反発と「満洲」支配への肯定という矛盾は一体なぜ存在し、しかも戦後になっても変わらなかったのか。その原因は、「満洲」の特徴性と戦後日本の社会状況とあわせて考えなければ解明できない複雑な問題であり、改めて別稿において論じる。

#### 4. おわりに

満鉄は強い文化発信力を持ち、『協和』はその社員会機関誌の役割を果たしつつ、文化の発信源ともなっていた。その中で、「満洲」のために「満洲」らしい文化を発展する方針の下、「満洲」における日本語文学の形成と発展に影響を与えた。『協和』は満鉄社員の生活支援や次世代の担い手育成などの目的を持ち、児童文化に力を入れていた。約2万部の刊行数を誇り、満鉄事業が全満各地域・各領域に広がっていたことを踏まえると、「満洲」の津々浦々で、大勢の児童に読まれていたことが予想できるだろう。児童文学者によって生み出された児童文芸が『協和』を通して多くの児童に届けられると同時に、子供も『協和』の「コドモノページ」を通して児童文化の生産に参加していた。勿論、満鉄社員会機関誌としての『協和』は児童文化を利用して、子どもに満鉄の威信を打ち立てようとしていたが、このように児童文化に関する内容を掲載する場を提供することにより、児童文化の発展を推し進めていたのである。その過程、特に児童文化を取りこむ初期の段階において、石森延男は作品を提供し、『協和』における児童文化の担い手となっていたのである。

一方で、『協和』は「満洲」において児童文化を普及させるとともに、石森延男などの児童文学者の活躍を支えたとも言える。石森は渡満初期にわたって『協和』に作品を発表し、それは彼の初期の重要な創作活動であった。最初発表したのは、大正時代の児童文学創作風潮の流れを組んだものであったが、「満洲」現地意識の萌芽によって、「満洲生徒のために」「満洲」を描く「満洲」童話を試作し始めたのである。『協和』に発表した初期作品は軍国主義教育批判が読み取れる一方で、彼にとって「満洲」は、戦争と関係なく、現実離れた理想郷であることが明らかになった。言いかえれば、「満洲」ににいるということは、石森にとって軍国主義の社会環境から脱出し、感性豊かな児童文学を創作することができる環境に身を置くということではないか。渡満初期に活発な創作活動が行われた『協和』が、彼を児童文学者として成長させた土台と言ってもよいだろう。『協和』における石森の活躍は、文学者が日本語雑誌を媒体にして、〈外地〉の文学・文化成立に影響を与える一方で、〈外地〉の文化環境も文学者の成長に舞台を提供した代表例と言え

よう。この相互関係は〈外地〉日本語文学の特徴でもあるだろう。

表3 『協和』で発表した石森延男の童話作品(児童劇やラジオプレイも含む)

刊行年月日	タイトル
1928.8.4	メーリーゴーラウンド
1928.8.11	浜風
1928.8.18	躓き(ものがたり)
1928.8.25	MARCH
1928.9.1	窓が明いた
1928.9.8	窓が明いた(二)
1928.9.15	窓が明いた(三)
1928.10.27	秋(ものがたり)
1928.11.3	ものがたり 少年と魔女
1928.11.10	ものがたり 秋大根
1928.11.17	ものがたり 運
1928.11.24	ものがたり 楡の木とアンテナ
1928.12.1	ものがたり 白い鳩
1928.12.7	ものがたり 白い鳩(二)
※ 以上は週刊にて掲載、以下は月二回刊にて掲載	
1929.5.15	見忘れた少年より
1929.8.1	童話方々 峯と空、メクラ葡萄
1929.8.15	童話方々(2)とほ眼鏡、ふるさと
1929.9.1	童話方々(3)巡礼ひばり、親鶏
1929.9.15	童話方々(4)トロッコ
1929.10.1	童話方々(5)キャラメル
1929.11.15	童話方々(6)遠足
1930.3.1	香圓集(童話)(1)沈丁花
1930.3.15	香圓集(童話)(2)ある石屋さん
1930.4.1	香圓集(童話)(3)宝石商の娘
1930.4.15	香圓集(童話)(4)山と子ども
1930.5.1	香圓集(童話)(5)山と子ども <sup>22</sup>
1931.4.15	児童劇・かさゝぎの子
1931.5.1	寒い夜明け
1931.5.15	満洲童話 石の寝床
1931.5.15	満洲童話 石の寝床
1931.8.15	童劇・雀とベチカ
1932.5.15	五月祭は
1932.8.1	ラジオプレイ 蟬

<sup>22</sup> 文末に「つゞく」と書かれており、未完だと考えられるが、続きは見当たらないため、不明となっている。

## 参考文献

- 石森延男(1972)「満洲児童文学回想」(『児童文学研究』第2号)。
- 谷口俊一(2000)「向大戦間期における軍人のイメージ——新聞投書欄を中心として」(『京都社会学年報』第8号)。
- 森かをる(2007)「『咲きだす少年群』と『コタンの口笛』における(日本語)・(種族)」(『名古屋近代文学研究』第15号)。
- 寺前君子(2011)「満洲における石森延男の足跡——同人雑誌『童心行』の概要と細目」(『中国児童文学』第21号)。
- 石森延男(1971)『石森延男児童文学全集』東京：学習研究社。
- 日本近代教育史事典編集委員会編(1971)『日本近代教育史事典』東京：平凡社。
- 浅井清編(1977)『日本児童文学大系23』東京：はるぶ出版。
- (財)満鉄会編集(1983)『協和』復刻版・龍溪書舎。
- 川村湊(2004)『海を渡った日本語』東京：青土社。
- 長谷川潮・鳥越信編(2012)『日本の戦争児童文学史』東京：ミネルヴァ書房。
- 文部省編(1981)「学制百年史」ネット公開([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317552.htm))。

### 魏 晨 Chen WEI

(日本)名古屋大学大学院文学研究科。博士後期課程。「満洲」をめぐる児童文化、植民地支配と帝国主義、比較文学など。「川端康成と綴方——戦時中の帝国主義とつながる回路」(『JunCture』第5号, 2014.4)。